

総合目録と分担制目録作業

—Universal Bibliographic Control へのアプローチ—

丸山 昭 二 郎

はじめに

20世紀前半における Universal
bibliography へのアプローチ
目録のスケール

世界のカード体総合目録

総合目録の変貌

on-line union catalog

=on-line shared cataloging

はじめに

昨年(1973年)のIFLA総会のテーマは“Universal Bibliographic Control”であった。このような試みはかつて19世紀にヨーロッパの書籍商や愛書家によって企図されたが実現せず、1860年には放棄されたとのことである。

Smithsonian Institutionの初代図書館長であったC.C. Jewettは1852年、当時としては画期的な構想を発表している。JewettはSmithsonianが米国の国立図書館になるべきだと考えていた。国立図書館としてはまず全国公共図書館の総合目録を維持するようにする。彼の調査で、当時の全公共図書館の蔵書は45万冊で、その3分の2の30万冊は共通タイトルのあるものだった。

全国共通の目録規則を定め、各館は自己の収書をこの規則にもとづいて目録しSmithsonianに報告する。共通タイトルに対し各図書館がそれぞれ独自に目録を作成するのは大変無駄なので、Smithsonianが各

記入ごとにステロ版(=鉛版:アメリカのWilson社は各種の目録の累積版をこの方式で編さんしている)を別箇に作成し、まず全体を並べ組み合わせて総合目録を印刷する。そのあとで記入ごとのステロ版をバラし、各図書館の収書別に並べかえて各館ごとの蔵書目録を印刷してそれぞれの館に返送しようというものである。

Jewettは別の理由で急に解任され、彼の壮大なプランはついに日の目をみることはなかったが、当時の通信や印刷関係の技術水準ではこの方式が成功するのはむずかしかったであろう。

20世紀前半における Universal bibliography へのアプローチ

現在UDCは世界中で広く使用されている。このUDCはベルギーの2人の法律家P. OtletとH. La Fontaineにより1895年ブラッセルに創立された、現在のFIDの前身である、国際書誌協会の活動の副産物だともいうことができる。彼等は当時べ

ルギー政府の補助金のもとで、15世紀以来の印刷物のすべてを記録した、全主題にわたる世界書誌を作成しようとしていた。そのためには国際会議を召集して各国の協力を求め、当時書誌作成技術の基準とするものがなかったため、分類目録編さんのためには米国で Dewey により1876年に発表された十進分類法を採用し、これに修正を加えてUDCとした。目録規則についても標準的なものが必要であったため、これもまた将来の国際協力を予見した Dewey の提案によって、英米両国の目録委員会が共同で制定した1908年の英米目録規則を用いることにした。

印刷目録を切り張りしたカードは1900年当時ですでに1,000万枚以上集まっていたとのことである。しかし1,000万枚以上のカードを統合し、編成するのは大変な事業であり、この計画は予算と人員不足のために1930年代になって完全に挫折してしまった。ブリタニカによると、1934年に1,450万枚のカードが集積されていたとのことである。

第2次大戦後にも、1947年のUNESCO会議で T. Besterman が universal bibliography の問題にふれ、ヨーロッパ各国の全国的な目録を統合すれば2,000万枚のカードは比較的短時日に集められると提言している。

目録のスケール

今世界最大の出版物だといわれているのは『全米総合目録(1956年以前刊行書)』である。現在順調に刊行されていて1976年に完結し600冊になる予定である。収録点数は約1,000万と称されている。大英博物館の蔵書目録(1955年まで)は263冊で収録

点数は約200万であり、LC(米国議会図書館)の最初の蔵書目録(1942年まで)は167冊で収録点数約190万である。

カード体の蔵書目録については、LCの1972年度の年報によると、その蔵書は約895万冊で、最大のカード目録(事務用基本目録)中のカード数は約1,921万枚に達している。アメリカにはハーバード大学図書館の蔵書数870万冊を筆頭に、蔵書数400万冊以上が6館、300万冊以上が7館あるもので、カード枚数で1,000万を越える膨大な目録がいくつか存在していることになる。

世界のカード体総合目録

LCの全米総合目録についての数字は若干相違があり、出版年も1961年と若干古いが、データの統一をとるためIFLAの提唱のもとに編さんされた Brummel と Egger による *Guide to Union Catalogues and International Loan Centers*⁽¹⁾ によって、表1を作成してみた。

この表では、総合目録中のカード枚数の多い順に排列してみた(10万枚以下のものは省略)。

また別途に図1と2を、表1にもとづいて作成した。国別にしてみると、丁度20ヵ国(ドイツは東西に分離せず)で、図2ではその国の総合目録がスタートした年の早い順に並べた。図中の番号はスケール順の表1の番号なので、番号が若いものはスケールが大きい目録である。記号は次のように用いた。

— = 全国総合目録

○ = 地域総合目録

— = 主題別総合目録

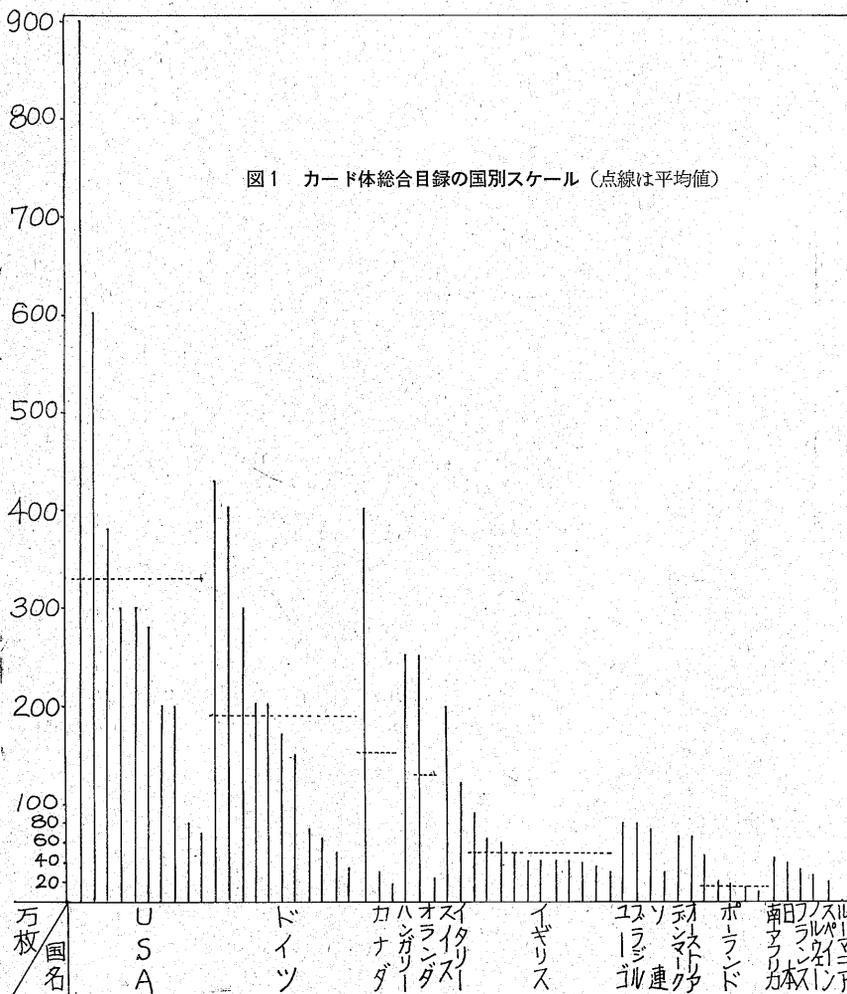
肩につけたローマ字は次のことを示す。

F = 外国のものだけ

表 1

番号	カード 枚数	創設年	名 称	番号	カード 枚数	創設年	名 称
1	900万	1901	全米総合目録	27	67万	1940	アトランタ・アゼンズ 地区総合目録
2	600万	1936	デンバー書誌センター	28	65万	1908	デンマーク総合目録 (1943年以降の刊本)
3	430万	1956	バーデン・ヴェルテン ベルク中央目録	29	65万	1956	下ザクセン中央目録
4	400万	1950	カナダ全国総合目録	30	65万	1950	オーストリア総合目録
5	400万	1891	フランクフルト総合目 録 (1501-1941, ドイツ 全体)	31	62万	1931	北部地区図書館局
6	380万	1940	ワシントン大学 (シャ トル) 書誌センター (太平洋岸北西諸州)	32	60万	1932	グラモーガン・マンマ スシャー地区図書館局
7	300万	1936	フィラデルフィア総合 目録 (ペンシルバニア 東部)	33	50万	1935	東ミッドランド地区図 書館システム
8	300万	1937	オハイオ総合目録	34	46万	1948	東ドイツ外国図書中央 目録
9	300万	1957	北ドイツ中央目録 (ハ ンブルグ中央目録<19 45>の改称)	35	46万	1945	ポーランド古書総合目 録 (15世紀から1800年 まで)
10	275万	1936	クリーブランド地区総 合目録	36	45万	1933	南東地区図書館
11	250万	1924	ハンガリー全国中央目 録	37	45万	1931	外廓総合目録 (イギリ スの大学・専門図書館)
12	250万	1920	オランダ中央目録	38	43万	1936	南西地区図書館局
13	200万	1938	ネブラスカ総合目録	39	43万	1929	アバリストウィス局 (ウェイルズ地区図書 館システム)
14	200万	1909	カリフォルニア総合目 録	40	43万	1931	西ミッドランド地区図 書館局
15	200万	1927	スイス全国総合目録 (1500年以降の刊本)	41	42万	1941	南アフリカ連邦合同目 録
16	200万	1948	ヘッセン中央目録	42	40万	1929	ロンドン公共図書館総 合目録
17	200万	1956	バイエルン中央目録	43	40万	1949	日本全国総合カード目 録
18	170万	1947	ノルトライン・ウェス トファレン中央目録	44	35万	1939	スコットランド総合目 録
19	150万	1948	ベルリン総合目録	45	35万	1952	フランス・アルジェリ ア外国図書総合目録
20	120万	1954	ミラノ市地区総合目録	46	35万	1905	プロシャ総合目録追加 目録
21	89万	1932	イギリス全国総合目録 (公共図書館網)	47	33万	1935	北西地区図書館システ ム
22	80万	1956	ユーゴスラビア外国 図書総合目録	48	30万	1950	ノヴァ・スコーシャ総 合目録
23	80万	1934	ノースカロライナ総合 目録	49	30万	1937	レニングラード外国図 書総合目録 (1946から モスクワを含む)
24	80万	1946	ブラジル総合目録	50	30万	1933	ノルウェー総合目録
25	76万	1940	ソ連邦外国図書総合目 録 (レーニン図書館)				
26	76万	1949	ザクセン・トアンハル ト中央目録				

番号	カード枚数	創設年	名称	番号	カード枚数	創設年	名称
51	23万	1926	オランダ工学総合目録	56	15万	1953	ポーランド科学論・科学史総合目録
52	20万	1942	スペイン全国総合目録	57	14万	1957	ポーランド外国図書総合目録(戦後収集分)
53	18万	1950	ポーランド教育学総合目録	58	10万	1957	ルーマニア全国総合目録
54	17万	1951	ポーランド定期刊行物総合目録	59	10万	1932	ポーランド外国雑誌総合目録
55	16万	1950	ニューブランズウィック総合目録				



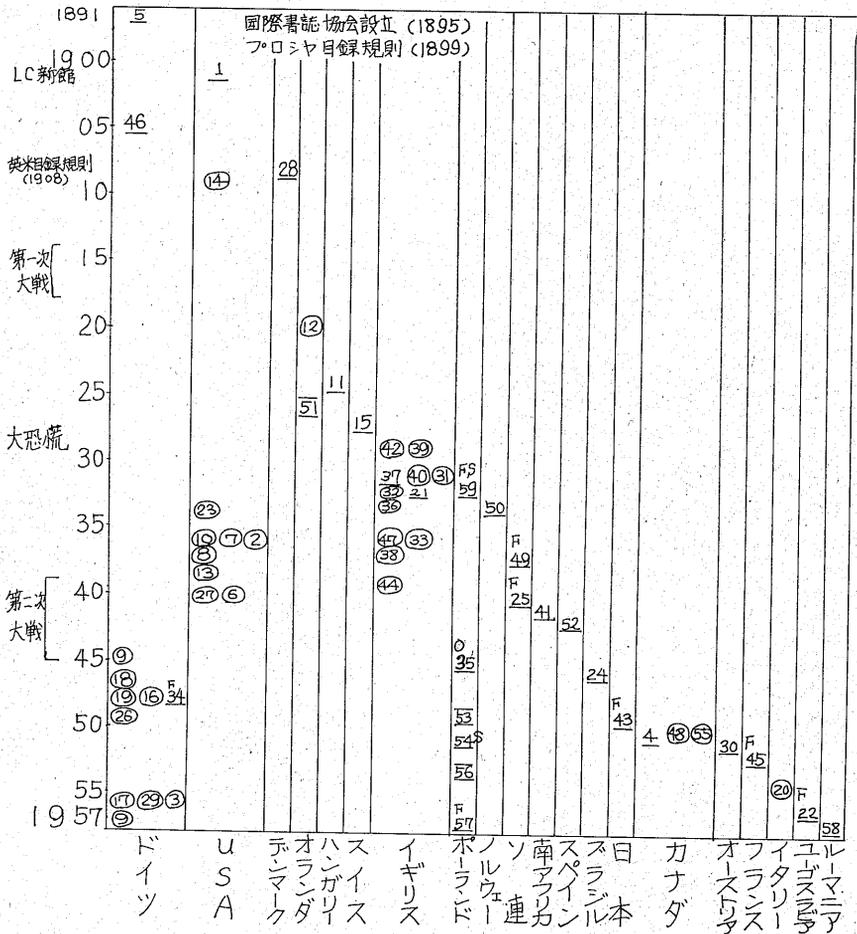


図2 カード体総合目録の国別、創設年順一覧

S = 逐次刊行物

O = 古書のみ

(肩にFSとあれば外国逐次刊行物を示す。)

これらの表と図から、大体以下のような諸点が指摘できると思う。

a. 全体的に

1) カード体の全国総合目録は20世紀にな

ってからのものである。

2) 第1次大戦前に全国総合目録をスタートさせたのは3ヵ国で、第1次大戦中およびその後の1920年代までは大した動きはない。

3) 1930年後に急にアメリカとイギリスに地域総合目録が増加する。1929年は例の大恐慌があった年であり、その後知的失

業者を救済する事業のひとつとして、図書館の目録カードのコピーとか、総合目録の編成が行なわれた。LCの全米総合目録に対するロックフェラーの補助金、イギリスの国立中央図書館の全国総合目録などに対するカーネギー財団の補助金も大きなファクターとして考えられる。

- 4) 1908年のデンマークをはじめとして、第2次世界大戦前に総合目録を設置したオランダ、ハンガリー、スイス、ノルウェー、南アフリカ、スペインは、南アフリカもヨーロッパ系と考えればいずれもヨーロッパの諸国であり、図書館については先進国と考えられる（米国等についてはあとでふれる）。
- 5) 第2次大戦後に総合目録が開始された国には、ブラジル、日本、カナダ、オーストリア、フランス、イタリー、ユーゴ、ルーマニアなどがある。
- 6) デンマークとイギリスについては、表と図では示すことができなかったが、次のように調査・大学図書館と公共図書館の全国総合目録を別箇に発足させている。

	調 査 館		公 共 館	
	創設年	カード数	創設年	カード数
デンマーク	1908	23万	1926	41万
イギリス	1931	45万	1932	89万

- 7) 外国書みの総合目録を維持している国は、日本とフランスを除くと、ソ連、東独、ポーランド、ユーゴスラビアなど共産圏諸国が多い。またポーランドの外国雑誌が1932年にスタートしたあと、ソ連の1937年1940年と続き、あとは第2次大戦後に発足している。これらの国では納本制が比較的良好に確立し、また総合目録の後発国である。

録の後発国である。

b. 国による特徴

1) ドイツ

相互貸借など図書館相互協力は早くから発達しているが総合目録も一番早い。第2次世界大戦までは全国的な目録のみで、第2次大戦後に比較的短期間に多数のカードを編成して地域総合目録が各邦ごとに設置されている。この点についてはドイツ学術研究共同体の政策により、相互貸借を義務づけた専門主題別収書補助金制度が実施されていることが、総合目録の必要性を各図書館に強く感じさせたからではないかとされている⁽²⁾。

2) 米国

LCの全米総合目録は世界最大の規模であり創設も早い。初期はLCカードとの交換で各館から得たカードを集積していたのにすぎないが、本格的に全米総合目録の編成と拡大が開始されたのは、1927年からの5年間に25万ドルを寄贈したロックフェラー基金以来のことである。地域総合目録も1935年の知識人失業対策事業(WPA)で多数設置されている。米国の総合目録の特徴はスケールがいずれも大きいことである。

3) イギリス

表で示したように、イギリスでは恐慌後の短期間に多数地域総合目録ができていて、かつ国立中央図書館には全国総合目録が設置されている。特徴は、表示したように、目録のサイズが全国、地域とも中規模で、90万から33万の間のカード枚数となっていることである。また国立中央図書館にある公共図書館総合目録は、1959年以降に全国書誌である British National Bibliography (BNB) に収録されたものを除くことにしたのは、全国

書誌と総合目録との連関性という点で重大な出来事である。

4) ポーランド

この国の総合目録の特徴は分割主義で一貫していることで、雑誌とか外国書、古書、主題別というようにわかれている、総合的なものはない。したがって、それぞれのスケールは大きくなく、専門主題のあるものは国立図書館以外の機関で維持されている。表示した以外の小規模な主題別総合目録には、図書館学、地図、演劇台本などがある。

総合目録の変貌

—背番号登録システム—

イギリスの地域総合目録ではBNBに記録された図書の収録をやめ、その代わりBNB番号で所蔵の通報を受けることにした。ロンドンと南東地区図書館システムでは、1970年からこのBNB番号を、図書自体に印刷されているISBN番号による通報制に切り替えた（イギリスでは、ISBN番号のない図書はBNBに収録しない方針をとっているため、ISBN番号の普及率は100パーセントである）。

テキサス州立図書館では、参加館である9の大調査図書館の目録カードをマイクロフィルム化し、それからLCカード番号と所蔵館コードだけをキーパンチ入力して、総合目録を機械化した。すでに68万冊を収録したとのことである。

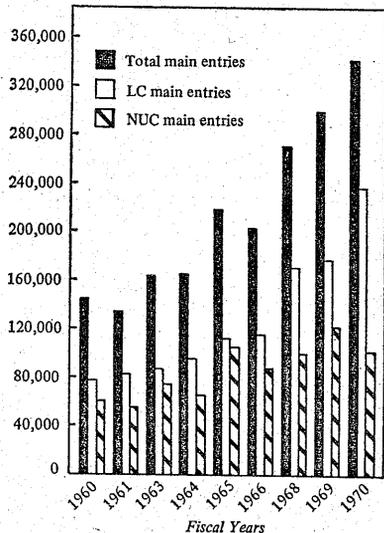
LCの冊子体目録であるカレントな全米総合目録も、所蔵館のロケーション追加は、今後別途にLCカード番号順の“Register of additional locations”で報告されることになった。このようにISBNとかLCカード番号のような背番号制は、書誌

的データがないため入力その他のコストが大変安くつくが、反面これらの背番号から該当する書誌のデータが即座に入手できる体制が整っている必要がある。総合目録が機械化されることによって、はじめてこのような可能性が生じたのである。

on-line union catalog=on-line shared cataloging

米国で1966年に開始されたNPAC（図書整理全国計画）については多くの文献ですでに紹介されている。図3はLC年報に掲載されていたものであるが、全米総合目録中に占めるLCカードと他の参加館からのカードの割合は1966年まで大体半々だったものが、1970年には大体LC3分の2、他館3分の1とLCカードの割合が増加し、NPACの効果が歴然と現われている。LCでは世界各国で出版された学術書を目録するとき、各国の全国書誌や国立図書

図3 全米総合目録年刊版の内容



館で作成する目録記入を利用して、これを Shared Cataloging と名づけている。

LC の MARC テープの MARC という言葉は普通名詞となっしまい、6 年先には 5 ヶ国から 15 ヶ国でそれぞれの国の national MARC の頒布を開始すると予想されている。

各国の出版物の書誌データがそれぞれ互換性を持ち、磁気テープで相互に交換するようになればこれは本当の意味の Shared Cataloging で、Universal bibliographic control の実現にだいぶ近づいたことになる。

しかし本当の意味の Universal bibliographic control が実現するには、オン・ラインで、かつ番号とロケーションだけでなく、完全な書誌データがディスプレイ端末に表示されるような世界的システムが完成しなくてはならない。

現在のところこのような世界的規模のオン・ライン・システムが完成するかどうかは予想できないが、州規模ではアメリカで成功している例がある。

現在 OCLC と略称されている Ohio College Library Center は、このオン・ライン化が成功していて、50 館あまりが参加している。他の地区のネット・ワークからも OCLC がうまくいったので実験的な参加を申し込み始めている。参加館は電話回線を用い CRT 端末で OCLC のデータ・ベースから著者名とか書名、LC カード番号でサーチし、該当のレコードがあればこれをディスプレイに出して確認してから印刷カード・セットをセンターに注文する。センターは 2 週間以内にそれぞれの図書館の所定の仕様で印刷カードを出力し、アルファベット順に排列したものを発注館に送付する。参加館がディスプレイでサーチし

て該当のレコードを発見できなかった場合は、ディスプレイを用いて入力する。このレコードはセンターのデータ・ベースにストアされ、参加館のロケーションがつく。1 秒後からはこのレコードを他館が使用できるのでこのシステムは on-line union catalog であると同時に on-line shared cataloging である。さきに述べた 120 年前の Jewett の夢はオン・ライン化でやっと実現したことになる。

OCLC のデータ・ベースは現在 LC の MARC が 30 万件、参加館入力など LC 以外のソースからのものが 70 万件近くあり、大体 100 万件に達している。現在書誌データをストアしたオンライン・システムでは大体 100 万台程度の処理が限度であり、将来の課題としては 1,000 万のオーダーのレコードが処理できるように、ハード・ソフトの双方について開発する必要がある。

すでに数字をあげたように、Universal bibliography では 1,000 万以上のオーダーの書誌レコード・ファイルを維持しなくてはならないからである。

注 MARC: 機械可読目録、具体的には磁気テープ化された目録記入。CRT 端末: テレビのような映像表示 (ディスプレイ) 装置。OCLC の使用している端末からは目録データの入力もできる。

参考文献

- (1) Brummel, L. & Egger, E. *Guide to union catalogues and international loan centers*. The Hague, M. Nijhoff, 1961. 89p.
- (2) 山崎 武「欧米の全国総合目録と本館」『図書館研究シリーズ』no.3. p.41-54. (1960)

(まるとやま・しやうじろう)

取書部外国図書課主査)